2F-21

特16
178

216
188

金光教管長御親教

完

(非賣品)

014038-000-7

特16-178

金光教管長御親教

畑 德三郎／解

M33

ABB-0292

金光教管長御親教

完

緒言

この一篇は吾が管長が嚮に就職御禮の爲參内せられし節將來の規範として去九月卅日の夜金光教東京教會所に於て親敎せられしものにて至りて簡單なるが今聊これが解釋を施して諸氏に頒つことゝなしぬ吾が敎の徒よ俱に共に努め勵みてこの御敎のまゝに彌進みに進み敎祖の神の御心の万一にも副へ奉れかし

明治卅三年十二月

金光敎東京敎會長權中敎正　畑　德三郎

垂示

掛巻も畏き吾が教祖の神、今を距ること四十九年、始めて神の御教を蒙り、現世幽界の事は更なり、天地の眞理を傳へ給ひ、其の露偏く霑ひ、稜威の光到らぬ隈なかりければ、高く尊き神恩を蒙り、限なき幸福を受くる徒は、恰も夏草の繁りに繁るが如くなれど、畏くも教祖御在世中の、御事を想ひ奉れば、社會の濁流に漂ひ、時勢の風浪に遇ひて、千難萬艱を經、幾多の心行を重ね給ひしは、今更申す

まてもなきことなり。抑、教祖の神の、此く身をも家をも顧み給はず、道を傳へ教を布き給ひしは、世人が、人生本來の面目をも知らず、唯迷信のみ増長して、邪徑に惑へる者多きを慨歎かせ給ひ、萬元の主こ坐す、天地の大神の、高大なる恩惠を説きて、人道の常徑を悟らしめ、各自が身の成り出でたる所以、日常行ふべき事理、身の本分等を知らしめて圓滿の幸福を享けしめ、此の世に在りては、忠良き臣民となり、此の世を去りては、神界の樂地に歸り、生死の安心を遂げしめむこの、御神慮なりしなり。されば數々の信條の中に、「今月今日で頼め御陰は和賀心にあり」。と教諭し給ひき。吾が教の徒よ。必ず、迷ふことなく、疑ふことなく、已れ既に神德を以て、この世に生れ出でたる幸福を、深く信じ篤く尊び、愈ますます、限なき御惠を受けよかし、又常に國家の爲に、冥助を乞ひ、慈惠を願ひ奉り、永く久しく、この福音を傳へて、治く世人の苦難をも救へよかし。已れ大陣が身に至りて、時なるかな。此度、本教の獨立教

派たることを許されたり。如何に教祖の神の御心にも、うれしこと思し召し給ふらむ。この喜の秋に遭ひては、益〻努めて怠ることなく、緩むことなく、愈己が心の玉を磨きて、世間の鏡となり、世人の智德を增進め、國家の泰祥を致して、吾が道の光を輝さむことを期せよ。

明治卅三年九月三十日

金光教管長　金光大陣

御親教解

申すも恐多いことであるが、吾が教祖の神が、始めて天地金大神の神傳を御受け遊ばされたのは、今より四十九年の昔、即ち嘉永五年といふ年であつて、其時豁然と、天地の眞理を御悟りあつて、諸人を御教へ御諭し遊ばされた。その御主意に、人の此の世に生れ來たのも、生きてこの世に居るのも、亦死して後、靈魂の歸着末も、皆神の御心によることであつて、世界にありとあるものは、前の世の事も、

派たることを許されたり。如何に教祖の神の御心にも、うれしと思し召し給ふらむ。この喜の秋に遭ひては、益努めて怠ることなく、緩むことなく、愈己が心の玉を磨きて、世間の鏡となり、世人の智德を増進め、國家の泰祥を致して、吾が道の光を輝さむことを期せよ。

明治卅三年九月三十日

金光教管長　金光大陣

御親教解

申すも恐多いことであるが、吾が教祖の神が、始めて天地金大神の神傳を御受け遊ばされたのは、今より四十九年の昔、即ち嘉永五年といふ年であつて、其時豁然と、天地の眞理を御悟りあつて、諸人を御教へ御諭し遊ばされた。その御主意に、人の此の世に生れ來たのも、生きてこの世に居るのも、亦死して後、靈魂の歸着末も、皆神の御心によることであつて、世界にあるものは、前の世の事も、

今の世の事も、後の世の事も、皆此の大天地の外に、漏れるといふことはない。抑此の大天地は、元は同一躰のものであつて、其の本元こまします、天地金大神の不可思議の妙力によつて、天こわかれ、地となり立つて以來、幾万年の間、日も月も星辰も、この地球も、大虚の中に、くるくる回轉りて、春夏秋冬などの時候も行はれ、草や木も出來て、花もさき實も結び、禽獸魚虫も生れて來れば、吾人々類も産れ、さて呼吸をなし、食物を食ひ、衣服を着て、それ〳〵の働をなし、

この様な社會の現象を作し、壽命終らは、復もとの天地に歸着るものである。かやうに何から何まで、この天地の惠を離れては、出來てくる譯のものでもなければ、勿論生きて居らるゝものでもなく、死して行處のあるものでもない、故に天地は、萬物の父母こもいふべきもので、又吾人が、生死を遂ぐべき安宅である。それゆゑ、この天地の本元こまず、天地金大神は、即ち万物の根元吾人の原始であつて、世の中の一切の事物は、大神の御德のまゝに行はれゆ

く、自然の生々化々の道理によつて、成立つてあるものであるから、人たるものは、この本元の大神の御德を、信じ奉り、尊び奉りて、私心なく、何事にもあれ、天地自然の道理に隨ひ行くこそ、人の眞の道である。　さすれば、又自づと、天地の大神の御心にも應つて、その御蔭をも蒙り得られるものであるといふことを、御述になつた。　今申すのは、固より御旨意の大概ではあるが、かやうに、教へ傳へ導き諭し遊ばされてから、この教を信じ、この道によつて、宏大な

る神恩を受けた人等は、てうど夏の野に蕃殖へる青草のやうに、多くなつて來た。　誠に喜ばしいことである。　されど、飜つて、教祖の神の、此の教を說き諭し遊された時の御有樣をかへり見れば、未だ社會の人智も進まず、諸科の學問も開けぬ時であるから、世人は矢張舊習に泥んで、吾が教の道理を悟ることが出來ず、却つて、種々教祖の教を誹るものもあり、罵るものもあつて、その甚しいものに至つては、終に教祖の神を、毒殺せんとまで企てたものさへ

あつた。この一つの事で、其の他の事は推して知られる事である。されども、教祖の神は、毅然として動じ給はず。常に備中國淺口郡大谷村(今は吉備村といひて大字を大谷といふ)なる木綿崎山の麓の茅屋に、端しく御座あつて、幾春の花は咲き匂へども、幾秋の紅葉は照り輝けども、鐵をも鎔すほどの暑い夏の日も、肌も凍るほどの寒い冬の夜も、少しも感じのないかの如く、齋き奉らせらるゝ大神の大前に、御仕へ遊されて、只管尊き神德を仰き奉り、詣で

來る人々に、日となく夜となく、少しも惓まず撓まず、說き教へ遊されて、三十年の久しい月日を、只一日の如くに、戸外にさへも立ち出で遊されたこともなく、己れを誹譏り、己れを迫害んとする者でも、猶慈母の放蕩兒を憐むやうな思召で、生涯の間、夜も日もわかたず、有り難くも御教へ御諭し遊された。さて教祖の神が、なぜかやうに御苦勞遊してこの道を說き傳へ下されたかといふに、世の中の人が、幸にも人と生れ來ながらも、その生れ來たるとの所

以をも知らぬによつて、その踏みゆくべき道をも辨へず、又死後の歸着を了らないによつて、人たるもの丶品位をも思はず、只々我情、我慾から、心に迷が出て來て、果はあやしき教に誑かされ、横さまの小徑に彷徨うて、世界には金神といふ、惡神邪神があつて、祟障をするものと、怖ち恐れて、廣い世界を、われから狹くし、やれ祈禱じや、やれ禁厭じやなど丶、人の心の自由を妨げ、あるは又信心じやなど、寒中に水行するの、斷食するのと、生理の理法をも覺らず、無理の祈願をこめ、迷信が凝つては、遂に、卑しい狐狸の類をすら、神と尊んで、其の前に禮拜するやうな、あはれあさましい有樣に陷つたのを、御慨嘆き遊されて、天地萬物の主、吾人々類の本体の祖神ごまします、天地金大神の洪大無邊の恩惠を說き明し遊されて其の神德によつて、萬物の靈と生れ來つた人は、他のものとは違つて、自づと人たるの心情、人たるの作行のあるとであるから、かりそめにも、我情にひかれて、人の道を踏みはづすとなく、我慾に

溺れて人の品位を落すやうなこともなく、正直にして憐深く、身を慎み、己が才智を磨いて、自在なる天地の寶を集め、生きて居る限は、各その業を勵み勤めて、身を立て家を起し、君には忠を盡し、親には孝を致し、夫婦は睦じく、兄弟朋友に至る迄、そのほど〳〵に立ち交りて、日本人としては、日本人たるの本務を盡すといふやうにあるならば、自然と天地の神の御心にも應つて、現世を樂しく安らかに暮し、さて壽命がつきて、死んだ後は、本來己れの生れ來つた

まゝに、何時までも變のない、樂しい幽界に立歸ることの出來るものである。このやうな事は、金錢のいることでもなければ、學問のいることでもなく、又別段にむつかしいことでないによつて、誰れに賴まねばならぬといふこともない。皆御互の心掛一つによることである。そこが人の人たる幸福で、數多き萬物の一として我々人間に及ばぬ處であるから、何卒して、世間の人等を敎へ諭し、人生本來の面目を識つて、この幸福を受けるやうにして遺

りたいと思召して、教祖の神は、己が一身の事をも、一家の上をもふりすて、千難万苦を遊されながら、この道を教へ下された譯である。それゆゑに、數々の御教の中に、「今月今日で頼め御蔭は和賀心にあり」とも仰せられて、何事も猥に屈托心配をするよりも、常に神明の恩頼の外ならぬことを、嬉しく喜んで、只日々を大事と心得、今日は今日一日、明日は又明日一日といふやうに、其の日其の日の神徳を取りはづすことなく、人たるの道を踏み違ふことの

ないやうにと、祈り行ひゆけよ。神の御蔭は、皆人々の心掛一つにあるものであると、御教へ御諭し遊された。殊にこの、我が心を、和賀心と、御書き遊されたのは、深き意味のあることで、人の心は、常に和ぎよろこぶ心になり居れこの事である。この、一人の、和ぎ賀ぶ心は、一家の和合となり、延ては、一村一郷一國の和合となり、果は、天地の和樂と合体になる、これが、即ち、神の御心と合体するのである。信者の徒よ。この御親切なる、有りがたき御教をば、よく

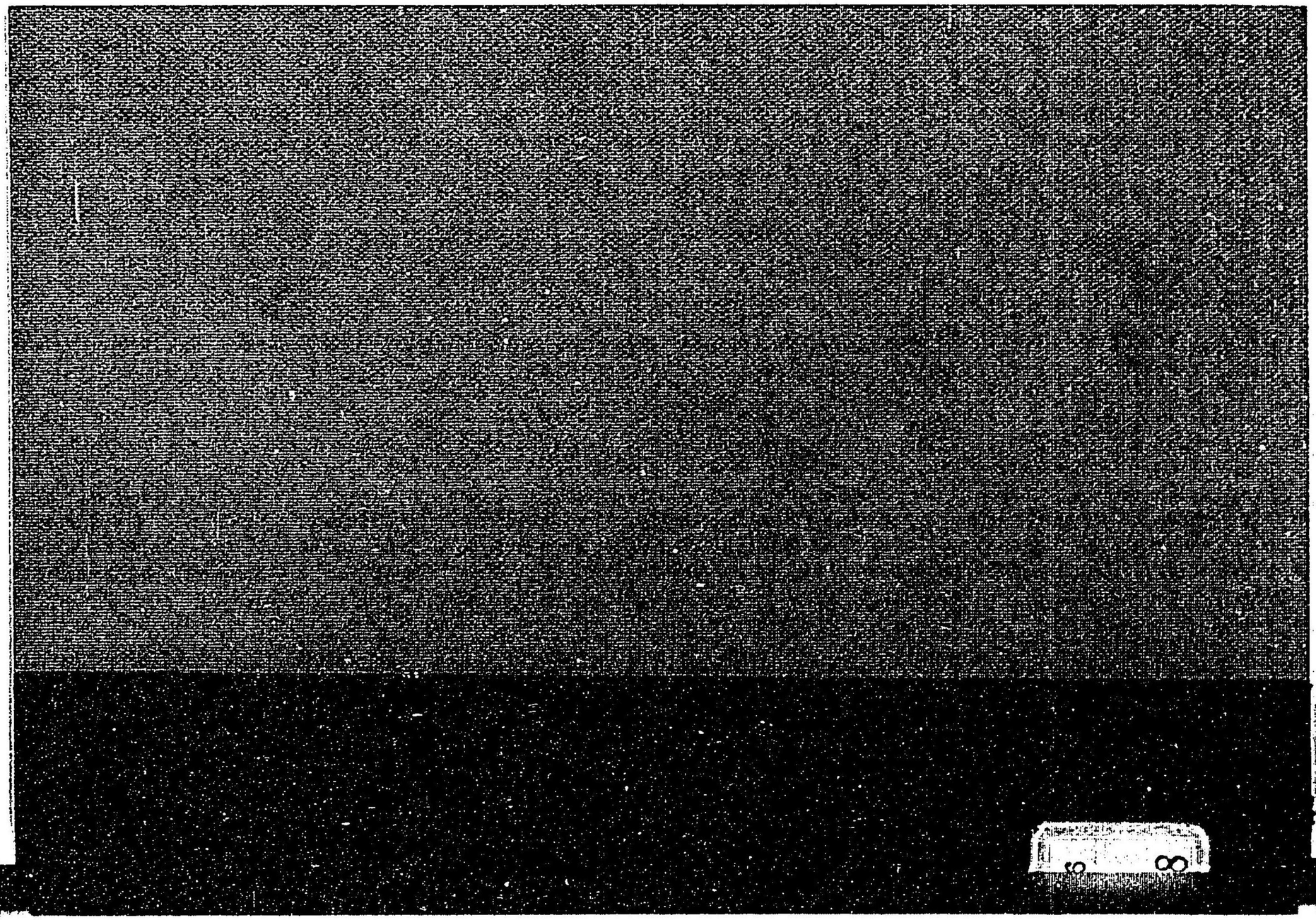
〳〵味ひ、深く考へ奉りて、必ず疑ふことなく、迷ふことなく、前にもいふ通り、此の身が現世に生れ來たといふが、早や神德であるばかりでなく、かやうに朝夕を過して居られるといふのも、知らず〳〵に神の恩賴を享けて居るのであると、有りがたく心得、篤く信仰して、猶此の上生涯の間、心次第で、どのやうにも戴くことの出來る恩賴を蒙れよ。又人たるものは、己ればかり結搆に暮せば、それでよいといふ譯のものではない。神敎の中に「人の身が大事か我身が大事か人も我も皆人」。といふ御言葉もある。御互に皆我が身を大事に思ふのは、人の常情であるから、我が身の安樂を願ふに就けては、亦人の身も安樂であらしたいと、心に希つて、常々親切に、世の人々にも、この眞の道の有り難い理由を說き傳へて、相共に神明の冥助を蒙つて、國家の泰平と、社會の隆祥を祈るやうにせよ。これが信徒たるもの〻心掛である。

さてこの道は、吾が敎祖の神が、天地の大神から、神傳を受

けて、始めて御教を下された、一派の教であるが、是迄は獨立の教派となることが出來ぬので、神道本局の厄介になつて居つたが、今度いよ〳〵時節が到來して、本年六月十六日付で、内務大臣より許可されて、金光教といふ、一派の獨立教となることが出來た。嘸かし教祖の神の御心にも、嬉しいことと思召されるであらうかと思はれる。これ全く、幽界の神助はいふまでもなく、時勢が開け進んで來たのと、信徒たちの信仰の力この結果で、斯樣の喜ばしいことはない。それゆゑに、信徒たるものよ。この喜ばしい秋に遭つては、單喜んで居る丈ではならぬ。是れからは、一層信心に力を入れて、仮にも怠ることなく、常々教師の教へるまゝに、從ひ勤めて、各々が生るゝと共に、大神より戴いて居る、心の玉を磨きに磨き立てゝ、私心の爲に曇らすことなく、邪教の爲に迷はさるゝことなく、世の人の手本ともなる樣にいたし、社會の文化に後れることなく、己か智識を開き、德性を養つて、世の人の品位を進ませ

るやうにし、日本帝國の臣民として、其の本務を怠ることなく、勉め〳〵て、國家の泰祥を圖り、天晴金光教の信徒たるべき面目を彰して、如何にも金光教は、天下唯一の教義である。國家神髄の教派であること、譽め稱へられる樣に勵み行へよ。

明治三十三年十二月廿二日印刷
仝　年十二月廿六日發行

非賣品

著者兼發行者　畑　德三郎　東京市神田區和泉町壹番地
印刷者　池田宗平　東京市淺草區黑舟町廿八番地
印刷所　東京並木活版所　東京市淺草區黑舟町廿八番地